

[社 会]

児童主導の問題解決的な学習を通して、 社会的事象を多角的に捉える児童の育成

— 小学校第4学年「福島江開発」を通して —

長橋 俊文*

1 はじめに

平成29年版小学校学習指導要領の改訂を受け、小学校社会科教科用図書が令和2年に発行された。採択された3社の社会科教科用図書¹⁾は、各単元内容が問題解決的に構成されている。教科用図書通りに学習を進めることは、問題解決的に学習しているようであるが、唐木²⁾は教師主導の問題解決的な学習であるという。教科用図書を基に学習を進めてきた自らの実践を振り返ると、問題解決学習を進めてきたつもりで過ぎない教師主導の問題解決的な学習に陥っているようである。

唐木³⁾は、問題解決的な学習は一時間単位、単元単位など、さまざまであるが教師が自律的に学習を構成するものとし、問題解決的な学習の課題を学習過程の画一化、自分事となっていない問い、社会参画を保証するものとして考えられていないことであるという。さらに、藤井⁴⁾は、問題解決学習の「問題」について児童が課題解決の過程において直面する障害であるとし、その障害を乗り越えるためには新しい知識や技能が必要とされるとする。問題解決学習は、児童が課題解決の過程において必要感に基づき知識や技能を習得し、具体的な場面で習得した知識や技能を使用するよう学習活動を導く指導方法であるという。また、井田⁵⁾は、情報通信などの発達により、日本のみならず世界各地での課題が、より一層早く広まり、世界的な課題がみえるようになったことを踏まえ、学校教育で習得した知識を活用する能力は社会にでてからではなく、学校教育で育成する必要性を説く。現代的な課題を把握し解釈するために必要な知識を習得、活用し、将来に向け持続可能な社会を構築する能力を育成することが求められるようになったという。

本研究では学習指導要領解説等に示される「問題把握、問題追究、問題解決」といった学習過程の画一化につながりかねない型にはめるのではなく、児童の追究意欲の高まりが見られる児童主導の「自分事となった問い」の問題解決的な学習を通して、習得した知識を駆使しながら社会的事象を多角的に捉えるという社会参画の素地となる能力の育成に有効な手立てを検証する。

2 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童自らによる問題解決に向け、学習過程に教師が一定の系統性をもたせつつ、児童自ら知識を習得し、自分の問いとして資料や他の児童の考え方を基に、地理的見方・考え方の観点によるアプローチ（位置・分布、場所、地人相関、空間的相互依存作用）を通して、さまざまな立場の人の考え方を踏まえ、多角的な考え方ですべての人の幸せの実現を願う社会参画しようとする態度を育成することを目的としている。

(1) 基礎・基本的知識を習得する場の設定

本単元において扱う社会的事象に関する基礎・基本的な知識の習得を、導入部分にあたる第1次にまとめる。本単元における基礎・基本的な知識習得の場を導入段階に構成することで、「これから、こんなことを学習するのか」、「この時間に学習していることはここらへんの段階だな」と見通しをもちながら学習を進められるようにする。基礎・基本的知識を習得した上で学習を進めることで、考え方を広げ、深める場面で、児童自ら新しく習得した知識が明確化したり、問題解決する過程において知識と知識のつながりを自覚したりしながら、思考・判断する姿を目指す。

(2) 地理的アプローチにより社会的事象を捉える場の設定

本単元で児童は、小学校第4学年ではじめて歴史的事象を扱う。社会的事象を遠い昔にあったできごとと捉えては、自分事として考えるのは難しい。そこで、本単元で扱う歴史的事象について、児童の生活根拠地から空間的に近く、現

*長岡市立豊田小学校

在も存在する場所を扱う。地理的アプローチをきっかけに、「昔にあった、あの場所」から「昔から現在まで続いている、あの場所」として捉えさせる。地理的アプローチをきっかけに社会的事象を捉えさせることで、空間と時間をつなぎ、本単元で扱う社会的事象を自分事として捉えていく姿を目指す。

(3) 多角的に思考する場の設定

社会的事象を多角的に捉えようとする際、あらかじめ教師が設定したさまざまな立場や人物について考えるのでは、受動的学習になる可能性が高い。そこで、課題解決に向け、児童自らの立場で考えるか、どの人物に焦点を当てるかを考え、児童主導の価値ある学習問題を練り上げる場を設定する。「自分で解決しなければならない問題」だからこそ、さまざまな立場で社会的事象について考え、自分と考え方が似ていたり、違ったりする他の児童の考え方を踏まえて思考・判断しようとする姿を目指す。

3 授業の実際

(1) 実施期間と対象

期間：2023（令和5）年10月～2023（令和5）年11月

対象：新潟県公立小学校第4学年児童35名

(2) 単元名「昔から今へ続くまちづくりー福島江開発ー」

(3) 単元の目標

福島江開発に尽力した桑原久右衛門や関係する人々の立場から、福島江開発を評価することを通して、多角的に社会的事象を捉える。

(4) 単元の概要

福島江開発とは、1648年から1651年まで長岡市信濃川右岸において、桑原久右衛門を中心として行われた用水路設置工事のことである。福島江開発は、当時の水不足や水不足がきっかけで起こる上組と北組の争いを解消しただけでなく、現在も主に農業用水としての恩恵をもたらしている。一方、当時福島江開発により土地を取られる人は工事に反対し、工事に参加させられる武士は桑原久右衛門を恨んだ。「福島江開発は多くの恩恵をもたらしたすごい開発、桑原久右衛門はすごい人」と捉えるだけにとどまらず、工事に反対した人の立場を踏まえながら多角的に福島江開発を捉え直していく。なお、上組とは、現在の十日町や宮内あたりの地域であり、北組とは、現在の黒条や新組あたりの地域である。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
福島江開発について調べ、概要をつかんだりまとめたりする。	福島江開発にかかわったさまざまな人の立場から福島江開発を評価する。	福島江開発と自分とのつながりを見いだしながら課題を解決しようとする。

(6) 単元の指導計画（全9時間）

次	時数	学習内容	学習活動	評価規準
1	1・2	福島江開発の概要を把握する。	福島江開発の概要を知る。	福島江開発の概要を把握し、自分なりに捉えることができる。 (知識・技能)
	3・4 ・5	福島江開発を民俗学的に捉える。	福島江開発で使用されたと推測される蓑やわらじなどを試着する。 桑原久右衛門が計画した幅22mの水路のメリット・デメリットを考える。	試着を通し、福島江開発について実感を伴った理解ができる。 (知識・技能)
	6	福島江開発を地理的に捉える。	福島江開発に至った水不足の理由を地理的に考える。	地理的根拠を基に水不足の理由を考えることができる。(知識・技能)
2	7	福島江開発にかかわったさまざまな人の立場から、福島江開発に対する捉え方を広げる。	桑原久右衛門、殿様、土地を取られた人、工事に参加した武士、上組・北組の農民の立場から福島江開発を捉える。	資料を基に福島江開発にかかわったさまざまな立場の人のメリット・デメリットを考えることができる。 (思考・判断・表現)
3	8・9	福島江開発を評価する。	福島江開発にかかわった人たちの立場を踏まえて、自分なりに福島江開発を捉え直す。	資料や仲間の考えを基に自分の考えを再構成することができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

(7) 手立ての実際

【手立て(1) 基礎・基本的知識を習得する場の設定】

第1次 1・2時間目

1時間目は、考古学を専門とする学芸員を講師に、福島江開発を進めた桑原久右衛門など、さまざまな立場の人物を中心に福島江開発の概要を把握した。長岡市の社会科教科用図書副読本を基に①桑原久右衛門の願い、②桑原久右衛門が福島江開発に向けて行ったこと、③工事に反対する人の考え、④工事の様子、⑤福島江の完成がもたらしたものを核に基礎・基本的知識を習得した。「福島江開発はすばらしい事業」、「桑原久右衛門はすごい人」と、福島江開発の捉え方が偏らないよう、福島江開発における利害関係者である①上組と呼ばれた地域の農民、②北組と呼ばれた地域の農民、③殿様の立場、考え方を扱った。2時間目は、「福島江開発で一番メリットが大きかった人は誰か」を学習問題とした。話し合いで、社会的事象について過去と現在をつなぎながら思考した場面は以下のとおりである。

過去の社会的事象を現在のこととつなぎながら思考した場面（2時）

T：学習を振り返りましょう。分かったことや考えたことをどうぞ。
 A児：福島江開発に多くの人が関わっていたなんて知らなかった。
 B児：ただ多くの人が関係していただけじゃなくて、いろいろな立場で、いろいろな考え方をもった人たちがいるって分かった。なんか、みんなのことを決めるのって難しい。正直、面倒くさいところもある。
 C児：たくさんの人の気持ちをきいて福島江ってつくったのかな。
 B児：聞くわけないじゃん。殿様が偉いんだから、偉い人が勝手に決めたんじゃない。
 D児：福島江開発っていいことだから勝手に決めてもいいでしょ。
 E児：でもやっぱ、偉い人が勝手に決めるとか、多数決で決めるとかはよくないと思うけどな。

福島江開発にさまざまな立場の人が関わっていたことから、当時の人にさまざまな考え方があったことについて、B児のように殿様が偉いから殿様が勝手に決めるのが当たり前という時代背景を捉えるだけでなく、E児は「偉い人が勝手に決めるとか、多数決で決めるとかはよくない」と発言した。E児の発言のように、権力をもたない人の立場や少数の立場で考える児童がいたことは、さまざまな立場を取り上げたことが作用していると推察する。権力を持たない人の立場や少数の立場に立って考えることは、持続可能な社会を目指す現代の基盤となり得ることにつながる。

まとめのシートでは、福島江開発で一番メリットの大きい人は誰か個人の考えを記述した。「桑原久右衛門」14名、「殿様」2名、「北組の農民」8名、「北組の農民と上組の農民」3名、「分からない」9名であった。桑原久右衛門を選んだ記述は「福島江開発のためにがんばって工事をして、畑に水を引いたし、桑原久右衛門がやりたかったことができたから」など、心情的な理由が多くを占めた。

3・4時間目は、民俗学を専門とする学芸員を講師に、福島江開発の工事で使用したとされる道具の説明を受け、蓑やわらじなど作業着を試着したり、もっこを担いだりした。現代では土を掘ったり石を砕いたりする際、ショベルカーやブルドーザーを使用するのにに対し、福島江開発の工事では、つるはしをおもに使用していたことなど福島江開発当時と現代を比較した。民俗学の視点から、昔の道具の特徴として、自分の使いやすいように作ったり、自分の体に合ったものを作ったりしていたことや、道具は鍛冶職人に頼み、手作りであることから簡単に手に入らないものであったことを教わった。本单元まで、児童は自分の立場を基準に、現在、自分の身の回りで起こっている社会的事象を捉えてきた。4学年になり初めて歴史的事象を扱う本单元において、福島江開発当時と現代の道具や作業着の機能性の違いに着目しながら「重そうなスコップみたいなもので土を掘り進めるのに相当の時間が掛かるし、とても疲れる」、「雨が降ったら蓑で作った蓑は重くなるし草履は滑るし、さらに大変だね」など、工事で使用される道具や作業着の試着を通して実感を伴った理解を基に、歴史的事象と現在をつなぎようとする姿が見られた。

5時間目は、福島江の水路幅が桑原久右衛門によって22mで計画されたメリットとデメリットを比較した。児童の振り返りシートの記述には、「幅が大きいということは、水の取れる量が多くなって水不足にならないのでいいと思いました」など水路に流す水量は多くなるというメリットがあるが、当時使用していた道具と作業着で22m幅の水路を何キロも掘り進める工事は「土地を大きく取ってしまうので、北組の人や上組の人たちが賛成してくれないかもしれないと思ったので、そこがよくないと思いました」など、土地を広く使うことや、身体的疲労が大きいこと、用水完成まで時間が掛かるというデメリットが挙がった。学芸員による専門的・体験的な学びにより習得した知識を基に、当時、自分が工事をするを想定しながら考える姿が見られた。

【手立て(2) 地理的アプローチにより社会的事象を捉える場の設定】

第1次 6時間目

6時間目は、図1を提示し、地理的に福島江開発に至る理由を考えた。福島江開発をすることになったきっかけは、水不足である。児童が住む地域が地理的に福島江開発に関係することから、「水不足に悩まされていた地域はどのような地域か」を学習問題とした。なぜ、信濃川の近くが水不足になるのか、地理的条件から福島江開発に至る理由を理解していった。P.33のA～E児と下記児童は同一児童である。

地理的な視点から福島江開発を捉えた場面（6時）

A児：あ、土合（児童が在籍する小学校区）がある。

A児：僕たちが住んでるところって、水不足だったんだ。

T：どのような地域が水不足ですか。

A児：争いが起こっていた地域は、信濃川に近いね。

B児：争いと信濃川は関係あるのかな。

T：確認ですが、争いが起こるのは、水不足の地域が関係しているということですね。

I児：水不足で稲が育たないから関係しています。

C児：大きい川の近くなのに、なんで、争いが起こるのか分からない。だって、川に近いから水不足にならない場所だよな。じゃあ、なんで（信濃川に近い上組と北組の）争いが起こるわけ？

D児：福島江の最初の勉強で、稲を育てるための水不足が理由で、争いが起こったって言ってたから、やっぱり、水不足でしょ。よくわかんないね。

T：この前の大雨で、みんなの学校の近くの信濃川の水があふれそうになったことがありましたよね。どこから、信濃川があふれそうなほどの水が流れてきましたか。

A児：信濃川の水があふれそうになったのって、長野の山から、水がたくさん流れてきたってことだよな。

（図1の資料を確認）山あるよ。猿倉山とこのぎり山と八方台があるじゃん。太田川や柿川をたどったら山がある。

C児：でもなんで、山が関係するの。

A児：そりゃ関係するでしょ。だって、山って高いじゃん。高い所から低い所に流れるってことでしょ。

D児：だから、信濃川の近くなのに、水不足ってこと？まだ、納得できない。

A児：水が高い所から、低い所に流れるよね。信濃川に近いところは山の高いところから遠いところだから、低い所は流れが遅いでしょ。

I児：あと、いっぱい雨が降らなきゃ、雨が信濃川に近い地域まで届かないってことだよ。

D児：すごっ。

E児：そういうことか。おもしろ。

T：この前、浄水場見学に行きましたよね。浄水場がなかったらどうですか。

C児：この前、水道の勉強で、きれいな水が浄水場から運ばれてくるって勉強したけど、浄水場がなかったら、うちの地域も水不足の可能性があるってことだよな。



図1 水不足に悩まされていた地域

出典：長岡市教育委員会「わたしたちのまち 長岡 活用の手引Ⅶ」，2013年，p.34.

*□で囲んだ地域が土合である。

*地図中西側に上組，東側に北組が位置する。

C児の「大きい川の近くなのに、なんで、争いが起こるのか分からない」という発言をきっかけに多くの児童は、信濃川に近い地域にもかかわらず水不足が理由で争いが起こったことに疑問をもった。信濃川が氾濫しそうになった出来事を想起したA児の「長野の山から、水がたくさん流れてきた」という発言により水は山から川へとつながっていること、また、A児の「山って高いじゃん。高い所から低い所に流れる」という発言から川の始まりが山であることから高低差に着目したこと、さらにI児の「いっぱい雨が降らなきゃ、雨が信濃川に近い地域まで届かない」という発言から雨量に着目しながら問題解決に向かった。児童は、生活根拠地の地理的条件に注目し、福島江開発当時から現在までを時間的につなぎ、自分たちの住む「土合」地域が水不足であったため過去に福島江開発が行われたこと、A児の「浄水場がなかったら」という発言から現在、未来と水不足になる可能性があることを理解した。

【手立て(3) 多角的に思考する場の設定】

第2次 7時間目

7時間目では、福島江開発を「上組の農民」と「武士」の立場に焦点化し、比較した。

福島江開発で大きなメリットがあるのは、荒れ地を開いたり用水路を造ったりして農業をさかんにしようと考えていた長岡藩の殿様、福島江開発により新しく水路の水が入る北組の農民である。一方、福島江開発に賛成と反対に意見が分かれたのが「上組の農民」と「武士」である。学習問題を『福島江開発でメリットが大きかったのは、「武士」と「上組の農民」のどちらか』とした。武士と上組の人と二項対立的に焦点化し、立場、意見の違いを比較しながら、現在の児童の立場から福島江開発の見方を広げ、捉え直していった。

I児を抽出した理由は、自分の考えをもつことができる一方、自分の考え方にこだわる一面があり、話し合いや資料を通じて考え方の変容を見るためである。P.33, 34のA, B, I児と下記のA, B, I児は同一児童である。

話し合い前のI児のシート（7時）

私は、上組の農民の方がメリットが大きいです。理由は、上組の人でも自分の土地が用水になってしまったかもしれないけれど、上組の人（農民）も、水が前までもたくさん取れて、水不足もほとんどなくなったと思うので、上組の方がメリットが大きかったです。武士にもメリットはあったと思うけれど、上組の人（農民）と北組の人（農民）以上にはメリットがなかったと思いました。

さまざまな立場で考えた場面（7時）

A児：上組は、福島江ができて米の取れる量が5,750俵に増えたから食べ物に困らないし、生活が豊かになるよね。もしかして、年貢が増えると偉くなれるかもよ。

B児：でも、北組は福島江ができて18,000俵に米のとれる量が増えたから、上組の人は北組を恨むかもね。

I児：上組は昔から太田川があるし、これからは安心できる。福島江はショベルカーとかの機械じゃなくて手作業だから壊れるかもしれないんだよね。

T：それぞれのデメリットはどうですか。

A児：上組は開発をしなくても、もともと川（太田川・栖吉川）があったから土地が潰されて狭くなった。そしたら年貢が納められなくて、福島江ができる前より認めてもらえなくなったかもね。

B児：武士なのに強制的に工事させられたから、プライドが傷つくんじゃない。戦うのが本当の仕事なのに敵が攻めてきてもすぐに戦えないじゃん。武士は、久右衛門を恨むかもね。

話し合い前後のシート記入、話し合い中は多くの児童が副読本や本時までの配布資料を確認していた。A児、B児は、下線部について「福島江ができて増えた米の取れ高」（出典：長岡市教育委員会編「わたしたちのまち 長岡」、2024年、p.114）を参考にしていた。I児は発言するだけでなく、A児・B児の考えを頷きながら聞く姿があった。

話し合い後のI児のシート（7時）

私は、やっぱり上組の人（農民）の方がメリットが大きいです。理由は、もともと川があったけれど、水不足になっていた地域もあったから、福島江ができたら、もっとたくさんの水が引けて、お米もたくさんとれると思うし、殿様に年貢を納めることができるから、メリットが多いと思いました。

I児は、話し合い前は「水が前までも」、話し合い後は「もともと川が」というように北組の農民に比べると水不足の心配が少なかったことを根拠に上組の農民の方がメリットが大きかったという考え方は変わっていない。話し合いを経て変化があったのは、「お米もたくさんとれると思うし、殿様に年貢を納めることができるから」の記述である。「上組の農民」のメリットが大きかったという考え方は変わらないものの、話し合い前は「上組の人（農民）と北組の人（農民）」という並列的な捉え方から、話し合いにおける取れ高の具体的な数値を受けた上で太田川が近くにあることを根拠に、福島江が完成してもやはり上組の農民が一番メリットが大きいですと考え方を再構成し、「上組の農民」と「北組の農民」を差別化した相対的な捉え方へ変容があった。全体での話し合いで米と年貢の関係、取れ高の具体的な数値がI児の考え方の基になり「上組の農民」、「北組の農民」、「武士」というように多角的に思考することにつながった。

4 考察と課題

(1) 考察

本実践は、自分の利益を優先的に考える立場、自分より困っている人を救おうとする立場などさまざまな人物の立場から福島江開発を捉えることができた。桑原久右衛門が中心となり行った福島江開発は、水不足や水不足がきっかけで

起こる争いを解消しただけでなく、現在もおもに農業用水として恩恵を受けている。一方、福島江開発をすることで土地をとられる人は工事に反対し、工事に参加させられる武士は桑原久右衛門を恨んだ。「福島江は多くの恩恵をもたらしたすごい開発、桑原久右衛門はすごい人」と桑原久右衛門を英雄的に捉えるだけにとどまらず、工事に反対した人の立場を踏まえながら多角的に福島江開発を捉え直していった。約400年前のことについて、当時の人に思いを寄せ、歴史的事象を時間的・空間的につなぐことができたのは次の二つのことが大きい。一つ目は、単元の導入段階を、本単元で必要とする基礎・基本的知識を習得する時間としたことである。学芸員を講師に習得した知識や、体験を通して実感を伴った理解は、福島江開発当時にいる自分を想像しながら学習する姿勢につながった。二つ目は、地理的条件から福島江開発を捉えたことである。児童の生活根拠地を基に福島江開発のきっかけとなった水不足の理由を探ったことは、空間的に他地域や、時間的に未来を扱う学習に応用できると考える。

本実践の前後にとった問A「社会（世の中）で起こっていることを知ろうとしていますか」に対し、「はい」と回答した児童が13ポイント増加した。社会参画をしようとする態度が育成された一方で、「いいえ」と回答した児童が8ポイント増加した。本単元における児童の記述から、複数の人物の立場を考えられる記述がある児童は「はい」と回答する傾向があるのに対し、福島江開発においてメリットの一番大きかった人物を学習問題にした際、話合いの前後を通じて一番メリットの大きかった人物が「殿様」や「北組の農民」など特定の人物に固定化され、さまざまな人物についてメリットやデメリットを記述することなく、多角的に考える記述の少ない児童に「いいえ」と回答する傾向があった。

問B「他の人の考えをきいて、自分の考えが変わることがありますか」に対し、「はい」と回答した児童が12ポイント増加した。一方で、「あまり」、「いいえ」と回答する児童が微増した。問Bに関して、問Aと似た傾向が見られた。

問Aと問Bの回答と児童の本単元における発言やシート記述内容の関係から、社会的事象を多角的に捉えようとする力を育成しようとした場合、問Aと問Bのいずれにも「はい」と回答した児童の傾向に、他者の考えについて賛成・反対のいずれにせよ、話合いで他者の考えについて質問したり、自分の考えと比較しようとしたり、シートに話合いの内容を記述するなど他者の考えを聞こうとする姿勢があった。また、問Aと問Bのいずれにも「はい」と回答した児童は既習事項である浄水場の仕組みやごみ処理施設設置条件などを想起しながら、広く社会のことも知ろうとする傾向があることが分かった。

問C「社会科で学習することが、自分と関係していると感じることがありますか」に対し、「はい」が増加した。一方で、「いいえ」がほぼ同じ割合で増加している。問Cの回答と児童の本単元における発言やシート記述内容の関係から、6時間目の「なぜ、信濃川の近くの地域が水不足になるのか」地理的条件から福島江開発を捉えようとした際の発言や記述には、川の始まりは山であること、水は高い所から低い所に流れること、雨量によって信濃川に近い太田川などの下流地域が水不足になることなど地理的条件から水不足の理由を理解している児童に「はい」と回答する数が多く、地理的条件から水不足の理由を理解していない児童に「いいえ」と回答する数が多い傾向があった。問Cの結果から、地理的に社会的事象を捉えようとすることで、時間的に現在から離れた、歴史的事象も自分事として捉える力を育成する傾向があることが分かった。

(2) 課題

本単元では、福島江開発に関わったさまざまな立場の人物を扱った。7時間目の学習問題『福島江開発でメリットが大きかったのは、「武士」と「上組の農民」のどちらか』のように対立軸があり、二項対立的な学習問題の場合、学習問題解決に向け自分の考えと比較しながら他者の考えを聞こうとする姿勢や記述がみられた。一方、2時間目のように複数の立場の人物についてそれぞれのメリット・デメリットを考える活動では、状況を把握することに留まり、他者の考えを聞くに至らなかった。さまざまな立場の人物を扱う際の手立てを検討したい。

引用文献・参考文献

- 1) 教育出版，東京書籍，日本文教出版
- 2) 唐木清志編著『社会科の「問題解決的な学習とは何か」』東洋館出版社，2023年，p.12.
- 3) 唐木清志編著『社会科の「問題解決的な学習とは何か」』東洋館出版社，2023年，pp.12～15.
- 4) 日本社会科教育学会編『新版 社会科教育事典』ぎょうせい，2012年，p.220.
- 5) 井田仁康監修，唐木清志・國分麻里・金弦辰編著『Well-beingをめざす社会科教育』古今書院，2024年，pp. i ～ ii .
- 6) 長岡市教育委員会編『わたしたちのまち 長岡 活用の手引Ⅶ』，2013年，p.34.
- 7) 長岡市教育委員会編『わたしたちのまち 長岡』，2024年，p.114.